慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　1回20日発行

三四会ホームページ

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（33353）1211（大代表）

第27回慶應医学賞受賞者決定

パンデミック制圧にも尽力した河岡博士とCAR・T細胞療法を開発したジューン博士

慶應医学賞は、世界の医学・生命科学の領域において医学を中心とした諸科学の発展に寄与する顕著、かつ創造的な研究業績をあげた研究者を顕彰するもので、1996年より49名の研究者に対し授与しています。第27回を迎えた今年の慶應医学賞は臨床分野を対象とし、受賞者に国立国際医療研究センター研究所国際ウイルス感染症研究センター長の河岡義裕博士と、米国ペンシルバニア大学医学部教授のCarl H. June博士の両名が決定、慶應医学賞審査委員会は下記のとおり授賞理由を発表いたしました。

第27回慶應医学賞審査委員【塩見春彦（委員長・慶應義塾大学医学部分子生物学教授）、有田誠（同 薬学部代謝生理化学教授）、天谷雅行（同 医学部皮膚科学教授）、久保田義顕（同 医学部解剖学教授）、中原仁（同 医学部内科学（神経）教授）、本田賢也（同 医学部微生物学・免疫学教授）、審良静男（大阪大学WPI免疫学フロンティア研究センター 特任教授）、清水孝雄（公益財団法人微生物化学研究会 常務理事、微生物研究所 所長、国立研究開発法人国立国際医療研究センタープロジェクト長）、高橋淑子（京都大学大学院理学研究科生物科学専攻教授）、田中啓二（公益財団法人東京都医学総合研究所理事長）、永井良三（自治医科大学学長）、野田哲生（公益財団法人がん研究会代表理事・常務理事がん研究所所長）、柳沢正史（筑波大学国際統合睡眠医科学研究機構（WPI-IIIS）機構長・教授）】

河岡 義裕（かわおか よしひろ）博士
国立国際医療研究センター研究所
国際ウイルス感染症研究センター長
東京大学医科学研究所　特任教授

授賞研究テーマ「パンデミック感染症の制圧を目指したウイルス病原性の解明」

河岡義裕博士はインフルエンザウイルスを人工合成する画期的な技術を、世界で初めて開発。インフルエンザウイルスを自由自在に作製することによって、その感染、増殖、高病原性獲得機構、更には薬剤耐性獲得機構について分子細胞レベルで明らかにすることに成功。特に、同ウイルスのゲノム変異がもたらす宿主受容体との親和性変化が、ヒトへの感染性や高病原性を高めることを実験的に示しました。

また、スペイン風邪を起こしたインフルエンザウイルスが、サイトカインストーム（炎症物質の暴走による過剰な炎症反応）を誘導することで宿主を死に至らしめることを示し、「ウイルス感染とサイトカインストーム」をはっきり関連づけました。そして、ウイルスの人工合成とその弱毒化によって、新型インフルエンザウイルスに対する新しいワクチンの開発にも貢献されています。

Carl H. June, M.D.（カール ジューン 博士）
米国ペンシルバニア大学
医学部　教授

授賞研究テーマ「新しい免疫治療戦略としてのCAR-T細胞療法の開発」

カール・ジューン博士は、CAR-T細胞療法の臨床応用を実現し、がん、感染症などに対する新しい免疫療法の領域を開拓しました。CAR-T細胞療法は、キメラ抗原受容体（chimeric antigen receptor: CAR）を産生するように遺伝子操作されたT細胞を用いた治療法です。

ジューン博士は、T細胞増殖における共刺激分子CD28の役割を解明し、キメラ抗原受容体に共刺激分子を組み合わせて発現させることにより、CAR-T細胞療法を抗原特異的に強力な細胞傷害活性を発揮する実用レベルの治療法に進化させました。そして、CAR-T細胞療法は、従前の治療に反応しない難治性急性白血病に対して画期的な治療効果を示し、世界の多くの国で承認を受け、実臨床の中で定着しています。

さらに、CAR-T細胞療法は、さまざまな分子を標的とすることにより、種々の病型の悪性リンパ腫、固形癌、さらにはHIV等の感染症に対する治療法として進化し続けています。

CAR-T細胞療法の臨床開発を通して、今後さらに発展する新しい治療戦略の基盤を構築したCarl June博士の功績は、慶應医学賞にふさわしいと考えられます。

さらに最近では新型コロナウイルス（SARS-CoV2）に対しても、同様の実験手法を用いることによって、さまざまなバリアント（変種）の病原性と薬剤への反応性の評価、感染モデル動物の開発など、パンデミック制圧に向けて幅広く貢献されています。

本賞は、世界十数カ国の著名な研究者および研究機関から推薦された候補者の中から、学内外約90名の審査委員による厳正な審査を経て、受賞者を決定しています。受賞者には賞状とメダルおよび賞金1000万円がそれぞれ贈呈されます。

本年は11月28日（月）に北里記念医学図書館2階北里講堂にて授賞式および受賞記念講演会を開催し、オンラインで同時配信を行う予定です。詳細は、決定次第「慶應医学賞」ウェブサイトに順次掲載いたします。

URL：https://www.ms-fund.keio.ac.jp/prize/

ブラジルPUCRS 名誉教授 森口幸雄君（27回）を表敬訪問

慶應義塾大学グローバルリサーチインスティテュート（KGRI）の海外キャラバンとして、安井正人所長（薬理学教授、68回）と中原仁副所長（内科学（神経）教授、82回）が、2022年8月3日から8日までブラジルを訪問しました。従前より共同研究等の交流が続いている、Pontifical Catholic University of Rio Grande do Sul（PUCRS）の視察が主たる目的でありましたが、同名誉教授でおられる森口幸雄君（27回）を表敬訪問することが叶いました。

森口幸雄君は戦時下の塾に学び、1948年に医学部を卒業。1971年にPUCRS教授となり、1973年には同大学においてラテンアメリカ初となる老年医学研究所を設立し、世界保健機関（WHO）の主任研究者などを務め、89歳（2015年）までPUCRS教授として世界の老年医学を牽引しました。

森口幸雄君の義父は細江静男君（8回）であり、29歳時に外務省の短期派遣でブラジルに渡りましたが、日系人開拓地の貧弱な医療体制を見るや、その克服のために同国の医師免許を取得し、無医村の巡回診療を始め、病院建設に注力するなど、その生涯を同国の医療水準向上に捧げました。ブラジルのシュヴァイツァーと呼ばれた細江静男君の巡回診療は、後に森口幸雄君に引き継がれ、現在は森口幸雄君のご子息である、森口秀幸君（Federal University of Rio Grande do Sul医学部内科学教授、元KGRI客員上席研員）がその任を担っておられます。この三代に渡る功績を讃え、森口秀幸君は2018年に帝国ホテルにて開催された式典において、第51回社会貢献者表彰を受賞しました。

塾医学部においては、本年で創立45年を迎える国際医学研究会（IMA）が医学生を毎年ブラジルへ派遣しておりますが、まさに地球の裏側で活躍する偉大なる先輩、森口幸雄君を訪問し、その薫陶を得ることが長年のミッションでありました。有難いことに、昨今のIMA活動においては、引き続き森口秀幸君のお導きをいただいております。

今回の出張に際しては、コロナ禍において躊躇いはありましたが、ご厚意に甘えて2022年8月5日に森口幸雄君のご自宅を訪問し、拝顔する栄に浴しました。ポルトアレグレ市の夜景が一望できる素晴らしいご自宅において、ご夫婦とお会いしましたが、お二人とも矍鑠としておられ、僭越ながらも健康長寿の鑑と存じました。間も無く97歳になるとは信じ難い健脚の秘訣をお伺いしたところ、毎日欠かさず20分近く歩かれているとのことで、コロナ禍においても自宅内で運動を欠かさないようにされているとのことでありました。

森口幸雄君からは、在学中の塾長であった小泉信三君が、敗戦に意気消沈し復学した学生に対し、祖国に尽くしたことを誇りに思うと激励し鼓舞したことなどの逸話を拝聴しました。いわく「小泉信三先生のようなお方がおられるので、慶應義塾は素晴らしいのですよ。あるいはまた、籠球部員として千葉医専へ遠征した時の思い出や、戦時下に出征し帰らなかった籠球部先輩のお話などをお伺いしました。

まさに地球の裏側で活躍する森口幸雄先輩と、その志を引き継ぐ森口秀幸君を表敬訪問できたことは光栄の至りでありました。益々のご活躍とご健勝をお祈りいたします。

（内科学（神経）教授　中原仁　82回）

森口幸雄君ご自宅にて
森口幸雄君ご夫婦（前列）、安井正人君（後列左）、森口秀幸君（後列中央）、中原仁君（後列右）

慶應義塾オフィシャルネクタイを贈呈
森口幸雄君（左）、森口秀幸君（右）

自宅に飾られた勲記
森口幸雄君（左）、安井正人君（右）

IMA第45次派遣団活動報告

パンデミック後初めての海外派遣 3人の6年生が42日間の活動に従事

団長　松原 健太郎（79回）

国際医学研究会（International Medical Association：IMA（通称アイマ））は、1978年、当時の医学部6年生3人が、医師になる前に〝医の原点〟を実体験し見聞を広げたい、と南米に渡ったことがきっかけで創設された学生団体です。以来40年以上に渡って、毎年夏に3―4人の6年生が派遣団を結成し、南米を中心とした異国の地における医学・医療を通じた国際交流を継続してまいりました。そして、事前の計画立案、準備、資金調達に始まり、海外で歴史、文化、医療を直に体感し見聞を深めるという一連の経験を通じて、若い医学生を大いに刺激し、彼らの自己成長を促す最良の学びの場を提供してまいりました。

しかしCOVID-19のパンデミックにより、IMAは2年連続して海外渡航が叶わないという未曾有の事態に見舞われました。第45次派遣団の橋本、中村、渡邉の3人の活動は、あれほど容易だった海外渡航が、これほどまでに困難な時代になったかと痛感することから始まったわけです。しかし彼らは、苦境に屈することなく揺るぎない熱意を持って準備を進め、ついに、400を超える慶應義塾大学の公認学生団体の中で、パンデミック後に初めてとなる海外渡航の許可を得ることができました。今夏イギリス、ブラジル、フィリピンにおける42日間の活動を終えた彼らは、まさにコロナで閉ざされた学生団体の海外渡航の扉を開けたと言えるでしょう。

今年度の団長を拝命した私にとっては、第22次派遣団員として訪れて以来、23年ぶりの渡伯となりました。彼らを応援する一人として同行し、目を輝かせて活動する3人の姿をみたとき、現地で体感し交流するという、パンデミックで失われていた大切なものをようやく取り戻すことができた気がしました。そして、〝未知〟を求めて世界に飛び出し、異文化に触れて新しい価値観を得る、というIMAに受け継がれてきたスピリットの尊さを改めて実感することができました。

将来ある学生に、またとない学びの場を与えるべくご支援くださったすべての皆様にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。そして団員一同のさらなる成長のために、今後とも温かいご指導を賜りますよう何卒宜しくお願い申し上げます。

【学生責任者】
橋本 峻（6年）

パンデミックにより先行きが不透明な中、私たちは今夏の海外活動の実現を目指し、計画を立てて参りました。団員の健康と安全を確保するため、活動国と活動内容について頻繁に話し合いを重ねた結果、「予防医療」の考察をテーマにイギリス・ブラジル・フィリピンの3カ国を訪問する方針となりました。

感染状況が改善しない中、大学から海外活動を認めていただくには幾つもの壁がありましたが、多くの皆様方のご理解、ご支援のお陰で、6月下旬、遂に渡航の許可をいただきました。

最初の活動地、イギリスでは、国民保健サービス（NHS）によりプライマリケアが充実しているイギリスの診療体系を考察するため、現地の専門病院や、King's College Londonなど大学病院にて実習を行いました。

続いてブラジルでは、現地公立・私立病院や大学病院を訪問し、実習を通してブラジルの医療格差を目の当たりにしました。また、サンパウロ大学の医学生と日伯医学生会議を開催し、団員それぞれが医療テーマに基づいて発表。松原団長による日本の血管外科の最新知見についての講演も、同じくサンパウロ大学病院にて行われました。

3カ国目、フィリピンでは、首都・マニラのWHO西太平洋地域事務局（WPRO）にて研修を実施。WPROでは、COVID-19や生活習慣病などあらゆる健康課題に対して、国を超えた枠組みで政策形成や支援を行っています。私たちはワークショップを通して西太平洋地域を取り巻く健康課題の現状を知り、公衆衛生学的視点から予防医療の考え方を学びました。

渡航してからは、それぞれの国の医療や文化、価値観に触れ、毎日が驚きの連続でした。実際に訪問するまでは見えてこなかった、各国の医療やシステムの良し悪しに触れ、日本の医療を客観的に捉えるきっかけになりました。イギリス・ブラジルでは、現地で出会った医学生の志の高さに刺激を受け、またフィリピンでは、スラム街のそば に富裕層が暮らす超高層ビルが立ち並び、圧倒的な格差社会を前に自分がこれから医療人として生きていく上で何を目指すべきか、自問自答を繰り返しました。

およそ一ヶ月半にわたる活動を通じ、各地で人々の心の温かさに触れ、素晴らしい知見に接し、世界の広さを痛感しました。今夏の海外活動、そしてIMAに入団してからの2年間で得られた貴重な経験を糧にして、これからの人生を歩んで参ります。

最後にこのような社会情勢の中でも現地で活動をサポートしてくださった阿比野宏先生（67回）、葛西健先生（69回）、水野裕也先生（86回）、阿部雄志先生（98回）をはじめ、私たちの海外活動を支援してくださった全ての皆様方に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

【会計】
渡邉夏実（6年）

この度国際医学研究会第45次派遣団は無事に海外活動を終え帰国いたしました。

日本のCOVID-19感染者数が世界一位と報道される状況下でありながら海外活動を完遂できた今、本研究会をご支援頂いた全ての皆様方への感謝の気持ちに溢れています。この場をお借りして、改めて深く感謝申し上げます。

私共は二年に渡り渡航の準備を進めて参りましたが、コロナ禍において一から活動を創り上げていくことに加え、世界情勢の悪化による原油の高騰や加速する円安という金銭的な問題にも頭を悩まされていました。そしてこのような状況下においても、如何に費用を抑えて予算の範囲内で充実した活動を可能とするのかが会計としての責務であり、その責任の重さを日々感じていましたが、こうして全ての活動を終えることができとても安堵しています。

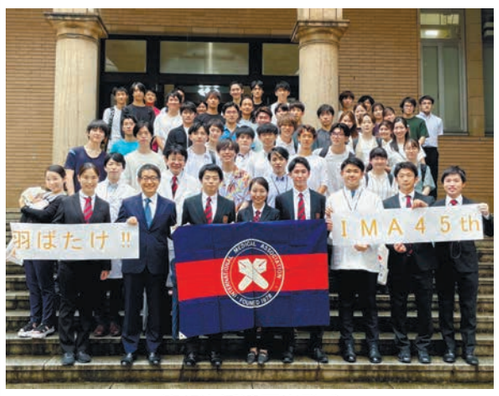
イギリスでは世界最高峰を誇る大学病院の医療に触れ、その舞台で活躍されている偉大な先輩方の姿を拝見しながら、これから始まろうとしている医師としての将来に輝かしい幾つもの夢ができました。一方でブラジルやフィリピンでは、日本とは比べられない程の格差を目の当たりにし、人の尊厳について考え、様々な葛藤を胸に抱えながら過ごす毎日を送りました。同時に社会や世界のために自身ができることは何なのか、真摯に向き合い続けた時間となりました。この活動を通して、各国の温かくそして大切な方々とのご縁や素晴らしい環境に恵まれて得ることのできた多くの経験を精一杯活かし、人を想い寄り添うことのできる医師になれますよう、より一層精進して参りたく存じます。

【渉外】
中村凌輔（6年）

渉外の主な仕事は、個人様や企業様から寄付金を集めることです。本研究会では、活動に必要な資金の全てを、寄付金で賄っております。学生の立場でありながら、企業の方々とコンタクトを取らせていただくという貴重な経験ができ、大変嬉しく感じております。またこのような厳しい情勢であるにも関わらず、応援、賛同いただき、ご援助くださったことに、この上なく感銘を受けました。ご協力賜りましたOB・OGの先生方、並びにご援助いただきました個人様や企業様に、この場を借りて改めて厚く御礼申し上げます。

私個人としては、本研究会での2年間の活動を通じて、「繋がり」の重要性を強く実感いたしました。新型コロナウイルス感染症によって、突如として人と人との「繋がり」が奪われた中、本研究会OBの先生方、慶應義塾の先生方、現地世話人の方々など、多くの方々との「繋がり」がなければ、活動を成功させることが出来なかったと言っても過言ではありません。そうした多くの「繋がり」が、現地で新たな「繋がり」を紡ぎ出し、私達は画面を通じてのみでは知ることの出来なかった世界を、目で、耳で、肌で体感することができました。

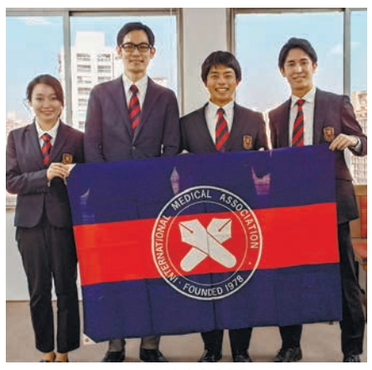
例年とは異なる形ではございましたが、伝統ある国際医学研究会の歴史に、新たな1ページを刻むことができたことを非常に喜ばしく感じております。今回新たに刻んだその1ページは、きっと今後の私の人生においてかけがえのない財産となることでしょう。私達第45次派遣団の活動を支えてくださった全ての方々への感謝を胸に、今回得た財産を原動力に変えて精一杯精進して参ります。



第45次派遣団出発式

ブラジルの大学病院での実習

WHOでの発表風景



第45次派遣団
（左から、渡邉、松原先生、橋本、中村）

2022年度
坂口光洋記念 慶應義塾医学振興基金 医学研究奨励事業

慶應医学賞 ライジング・スター賞
候補者募集

公募内容
慶應医学賞 ライジング・スター賞　2件（1賞につき副賞として100万円授与）
対象課題：自由

審査基準
・過去数年間に医学の領域において顕著な業績を挙げた研究者
・卓越した業績を有すること、および、候補者が指導性をもって研究体制を構築し、活動を行っていることを重視する

対象者
・博士号を有する、またはそれに相当する業績があること
・対象者は慶應義塾大学医学部三四会員または慶應義塾大学医学部に所属する者（三四会員資格については http://www.sanshikai.jp/gaiyou/kaisoku.html会則第6条2項を参照）
・過去に医学振興基金医学研究奨励賞または慶應医学賞 ライジング・スター賞を受賞した者は応募不可但し、過去に落選した者の再応募は差し支えない
・2022年9月1日時点で45歳以下（但し、ライフイベント等の考慮すべき事情がある場合はこの限りでない。申請書「3.備考欄」に記載のこと）
・推薦者は自薦・他薦ともに可。他薦の場合、同一推薦者から複数名推薦可能

申請書類・申請方法
① 慶應医学賞 ライジング・スター賞 申請書(所定様式)
② 推薦書(他薦の場合のみ提出)(所定様式)
③ 医学誌に掲載された論文数一覧（2017年～2022年)(所定様式)
④ 主要論文別刷1編
申請書「6.研究業績(2017年～2022年)」欄において「主要論文」として印をつけた1編の別刷

医学振興基金ホームページから募集要項をご確認のうえ、所定様式①～③をダウンロード、オンラインフォームに入力、必要書類をアップロードして提出してください。
医学振興基金ホームページ　https://www.ms-fund.keio.ac.jp/shorei/

★締切：2022年10月19日（水）正午

当基金の医学研究奨励事業委員会で審査、結果は2022年12月上旬頃に通知します。
また、2023年1月5日(木)の医学部新年祝賀式において受賞者の表彰ならびに、別途、受賞記念研究発表会を開催します。

お問い合わせ：医学振興基金事務室
E-mail: k-msf@adst.keio.ac.jp　Tel: 03-5363-3609
〒160-8582 東京都新宿区信濃町35番地　（2号館5階S棟）

鑑賞知来

2019年コロナ禍が始まった時、我が家はベルギー留学を始めて約半年が過ぎた頃でした。辛く厳しい冬を過ごし、ようやく気候が良くなってきたタイミングでした。以来、ベルギーやヨーロッパ諸国が苦労しながら、社会制限やワクチン行政を進めてきたのと対峙し、今に至るまでを体感してきました。そして、今夏3年間の留学を終え帰国した我々を待ち受けていたのは、激変した社会と過去最高の感染者を記録した第7波でした。

ヨーロッパ諸国はウィズコロナに舵を切って弱者を見捨てている、彼らはマスクが嫌いなので着けることが出来ないなど様々な風説を他人事と思えず聞いてきました。初期には、西洋人は靴を脱がないので、ウイルスを持ち込んでしまうなんて話もありました。全てが嘘ではないでしょうが、どう考えてもおかしい事もあります。しかし、彼ら欧州人に一貫して感じるのは、彼らは生活を如何にして幸せに暮らすかという考えがベースにあり、そして、持続可能な社会が前提にあります。彼らが思う人間らしい生活を実現するために社会的折衝を重ね、現在の形、つまり元の生活とほぼ変わらない社会に落ち着いています。

さて、日本はどうでしょうか。コロナ禍が始まる以前と比べて、生活スタイルが変わってしまった人も多いでしょう。それは幸せな生き方ですか？と、僕はそれぞれの人に問いたいです。海外に出て気づいたことは、日本の社会は現在の日本人が好むように作られていますが、システムとして持続可能かどうかは二の次という事です。例えば、病院はフリーアクセスで即日、専門家にアクセス出来る、そして費用も安い。日本にいれば当たり前ですが、外では当たり前ではありません。これは医療従事者の自己犠牲と財政負担によって成り立っていますが、それは持続可能でしょうか。今後の日本はどのように自分達が望む社会を作っていくのでしょうか。

（内科学（消化器）教室　森英毅　87回）